

カズオ・イシグロの『わたしたちが 孤児だったころ』の意味するもの* —バンクスが語らないものと比喩の解釈を中心に—

武 富 利 亜

1. はじめに

『わたしたちが孤児だったころ』(When We Were Orphans, 2000)¹は、カズオ・イシグロ (Kazuo Ishiguro, 1954-) の五作目の長編小説で、上海とロンドンという二つの都市が物語の舞台になっている。主人公のクリストファー・バンクス (Christopher Banks) は、両親を十歳のときに〈謎の失踪〉という形で失い、孤児となる。その後、伯母が住むイギリスへと渡り、教育を受け、ケンブリッジ大学を卒業後に探偵となり、両親を捜索するために再び上海へ戻る。捜索の過程で、両親失踪の真相を知るという構成になっている。一見、この小説は、子どもから大人へと成長した主人公がミステリーを解決する探偵小説と捉えられそうだが、そうではない。イシグロも「最初にはアガサ・クリスティ的な英国の典型的な探偵ものを書こうと目論んでいたのがなかなかその通りにいかなくて (中略) 探偵ものにこだわるのはやめた」(阿川 145-146) と述べている。『わたしたちが孤児だったころ』は、阿片貿易をめぐる両親の確執、中国マフィアの陰謀、少年時代の記憶と現実の矛盾、父親代わりとなるフィリップおじ (Uncle Philip) の裏切り、バンクスが唯一心を許したサラ (Sarah) との出会いと別れなど、むしろバンクスの回想録と呼ぶにふさわしい小説といえるだろう。

* 本稿は、九州大学大学院に提出した筆者の博士論文の一部に加筆・修正を加えたものである。本稿の内容及び書式について、数多くの有益なコメントをいただき、その内容についてご議論頂いた本学会の匿名の査読委員お二人及び編集委員長の野村忠央氏 (北海道教育大学) に、記して謝意を表す。言うを俟たず、残る不備・遺漏は筆者一人に帰せられるべきものである。

イシグロの小説は、三篇目の長編小説『日の名残り』(*The Remains of the Day*, 1989) までは、リアリズム小説として位置づけられていた。しかし、『日の名残り』の出版後、イシグロは「これからはもう少しドストエフスキー型の書き方を探りたい」(和田 103) と述べ、リアリズム小説家としての枠組みからの脱却を試みるようになる。四篇目の『充たされざる者』(*The Unconsoled*, 1995) は、イシグロのそれまでの小説の技法から一線を画し、カフカ (Franz Kafka, 1883-1924) の『審判』(*The Trial*, 1914-1915/1925) を思わせるシュール・リアリズムな小説となっている。本稿で取りあげる五篇目の『わたしたちが孤児だったころ』は、リアリズムとシュール・リアリズムの中間に位置しているといえる。

イシグロが1930年代の上海を小説の舞台に選んだのは、二つの理由が考えられる。一つは、イシグロの祖父や父の実体験を小説に反映させるためである。平井法によると、イシグロの祖父である石黒昌明は、上海に豊田紡績廠を設立するにあたって責任者となり、イシグロの実父と父の姉二人も、上海や天津で生まれ、幼児期をそこで暮らしたという (28)。従って、イシグロの幼少期の実体験をモチーフにしているとみているものは多い²。二つ目は、イシグロの描きたいテーマと舞台設定や時代背景が1930年代の上海と合致したからだと思われる。イシグロは、グレゴリー・メイソン (Gregory Mason) とのインタビューで小説を創作するにあたり、歴史的事実に沿ってテーマを描くというより、自分が描きたいと思う主題を決めて、その後でそれに合った時代背景や舞台を探す (8)、と述べている。つまり、イシグロにとって、バンクスという主人公が過去を語るときに〈阿片〉という舞台道具と、中国マフィア、上海、日本、イギリスが関係する時代背景が必要だったのである。

イシグロは『わたしたちが孤児だったころ』を出版した際、「全体の仕組みは分からないけれど、自分が何をしたいかということは分かっている。読者に何を感じてほしいか、ということは、常に分かっている」(池澤 17) と述べている。また、イシグロは『わたしたちが孤児だったころ』の主人公の記憶について、次のように述べている。

時間の流れに沿って書かなくてもいい、子どものころのエピソードの次に、つい昨日のエピソードを書くことも出来る。読者はそれをみて、

なぜこの人物は、この出来事の後この出来事を思い出したのか、と考える。(中略)まったく別の出来事のようにみえるこの二つが、なぜ並んでいるのかと思い、ある種の緊張感が生れる(池澤16)。

バンクスは、〈記憶〉を〈現実〉と〈空想〉の狭間で語っており、物語の本質を解き明かすのは、バンクスが語らないものや比喩となってあらわされていることの方が多い。従って、比喩や登場人物が語る記憶や台詞の行間に、直接口には出さないが、主人公のいいたいことが隠されているとみていいだろう。つまり、イシグロが敢えてバンクスに語らせないものの中に真相が隠れていると考えられる。

坂口明徳は、『わたしたちが孤児だったころ』という題目は、バンクス、サラ、ジェニファーの三人の「わたしたち」が「孤児」として過ごしてきた「ころ」という意味⁽⁴⁾だと述べている。松岡直美は、『わたしたちが孤児だったころ』を「『文化的孤児』の心の形成とその責任の考察を可能にした」⁽⁹⁹⁾と語っている。また、この作品のもう一つのモチーフとなっている〈阿片〉は、バンクスの不安定な精神状態を暗喩する道具にもなっている³。廣田園子は、「阿片貿易はバンクスの悲劇の主因として描かれており、作品全体のプロットを構成している(訳は論者による)」⁽²³⁾と指摘する。トビアス・ドーリング(Tobias Doring)は、バンクス自身が「阿片を吸引している(訳は論者による)」⁽⁸¹⁾のではないかと疑問を投げかけている。

本稿では、バンクスと阿片を関連づけて考えるのではなく、バンクスが語らないものや比喩に焦点をあて、その意味を中心に考察し、イシグロが意図したこの小説の本質を探りたい。

2. 羽根板と燃り糸の意味するもの

バンクスは、上海という様々な人種が暮らす中の租界(International Settlement)でイギリス人夫婦のあいだに生れた。そこは、中国が1930年代に実在した、嘘・欺瞞・阿片・マフィアによる無差別殺人などといった暗黒世界から隔絶された、外国人が多く住む、比較的安全な区画である。イシグロはその区画を舞台に選び、小説を書いたと思われる。

バンクスの家は、きれいに刈り揃えられた英国製の芝が生える庭と榆の木が囲いのかわりに並べられた大きな白い家で、バンクスの父親が働く、モーガンブルック・アンド・バイアット (Morganbrook and Byatt) 社の社宅である。社宅には、バンクスの他に両親とメイ・リー (Mei Li) という乳母、そして何人かの召使が同居している。隣には、バンクスの友人である日本人のアキラが住んでおり、バンクスは、アキラの家を次のように回想している。

友達 [アキラ] の家は、建築の観点で見れば、わたしの家ととても似ていた。実際、二十数年前に同じイギリスの会社によって建てられたと父に聞かされたことを覚えている。しかし、家の中は、わたしの家とはかなり異なるものだった。(中略) なかでも目を引いたのが、アキラの両親が家の最上階につくった二つの“模倣”和室だった。そこは、床に日本の畳を敷き詰めた、狭いがきちんと整頓された部屋で、紙製の羽目板が壁にとりつけられていた。(中略) 特に興味をそそられたのはドアだ。外側、つまり“西洋”側は、磨かれた真鍮のノブがついたオーク板がはられたドアになっていて、内側、つまり“日本”側は、漆塗りの繊細な和紙の台紙がはめ込まれたものになっていたのだ (74-75)。

バンクスの家は、外観も内装も英国式であることが分かる。しかし、家の中は中国人の召使らが同居し、バンクスは中国人のメイ・リーに宿題や勉強をみてもらい、教育を受けていた (72)。一方、アキラの家は、みかけはバンクスの家と同じ英国式建築なのだが、内装はまったく異なっている。これらの家が示すのは、バンクスとアキラのアイデンティティだろう。バンクスは、イギリス人の両親のあいだに生れたが、母国を知らず、上海に育ち、教育を受けている。更に、英国式の家に住みながら中国人のメイ・リーに育てられている。アキラの家は、外観は英国式であるが、家の中は、まるで「本物の日本の家」(96) のようだとあらわされている。外国に住んでいても、両親は日本語で話し、日本人としてのアイデンティティを固守する家庭であることが示されているのである。

また両少年は、母国に対しての憧憬とともに、自らのアイデンティティ

に自信が持てずにいる。例えば、新入社員がイギリスから上海へ転勤などでくると、一定期間、バンクスの家に滞在していたのだが、バンクスは当時を振り返り、次のように述べる。

上海にまだ慣れていない新入社員が“お客様”として我が家に泊まりに来ていた。(中略) お客としてくるのは、大抵、若い青年で、コナン・ドイルの推理小説に出てくる霧深い通りや『楽しい川辺』でしか知らなかったイギリスの小道や草原の雰囲気を選んで運んでくれたので、わたしは全く気にならなかった (54)。

このようにバンクスは、ケネス・グレーム (Kenneth Grahame, 1859-1932) の『楽しい川辺』(*The Wind in the Willows*, 1908) でしかみたことがなかったイギリスの小道や草原、あるいは、コナン・ドイル (Conan Doyle, 1859-1930) といったミステリー小説に登場する霧深い道など、若者たちがイギリスから運んでくる話の中に、自分が映像でみた情景を重ねて味わっているのが分かる。また、バンクスは、その若者たちのことを、「彼らは近くで注意深く観察しながら、真似るべき人物だった」(54) と述べ、イギリス人の模範としていたのである。一方のアキラは、バンクスと遊んでいる最中でも、日本について「日本もイギリスのような偉大で立派な国になったんだ」(82) と自慢するなど、日本人は優秀だというのが最大関心事であることが示されている。このことからアキラもバンクス同様、母国に対しての憧憬と尊敬を持っていることが分かる。しかし、アキラが長崎に一時帰国して上海に戻ってくると、アキラの祖国に対する見方が一変する。アキラは、日本に帰り、はじめて同民族の中で生活をして、自分の〈異質性〉に気づかされたのだ。バンクスは、アキラの様子をみながら、日本に滞在中のアキラは、ずっと仲間外れにされて、「みじめな」(“miserable”) (94) 思いをし、孤立していたのだらうと考える。バンクスは、ここで“miserable”という単語を使用しているが、バンクスはそれを認めこしないものの、後に級友から「みじめな孤独野郎」(“miserable loner”) (195) と呼ばれることになる。つまり、このときすでに、バンクスは自分の姿をアキラに重ね合わせていたことが呈示されるのである。また、両親が口論し、互いに口をきかなくなったということをバンクスがアキラに打ち明ける場面がある。

アキラは、自分の両親が互いに口を利かなくなるときは、アキラが日本人らしくない、あるいは、日本人として恥ずかしいことをしたときだ、と説明する。ここでアキラはバンクスに対し、イギリス人らしさが足りない、あるいは、イギリス人として恥ずかしいことをしたから両親は互いに口をきかなくなったのではないかと婉曲的にいっているのである。そして、アキラは、窓の日よけの木製のブラインドを指さし、バンクスに次のように語る。

ぼくたち子どもは、あの木製の羽根板をつなぐ撚り糸のようなものなんだよ。むかし、日本人の僧侶から聞いたことがあってね。ぼくたちは気がつかないけどさ、家族だけじゃなく、全世界をつなぎとめているのは、ぼくたち子どもなんだ。もしぼくたちが任務を果たさなかったら、羽根板ははずれて床の上に散らばってしまうんだ(77)。

日本人僧侶がアキラに話して聞かせたのは、「子は鎧」という日本のことわざだと考えられる。夫婦をつなげる役目を子どもが担うというものである。それをアキラは、ブラインドの羽根板と撚り糸に喩えてバンクスに話したのだ。夫婦をつなぐ役割を子どもが果たせなかったら、羽根板が床に落ちて散り散りになるように、家族も、延いては、世界もそうなることを説明する。そもそも、「子は鎧」というのは、子どもに対する愛情が夫婦の絆を強固にするということわざであるが、アキラ自身の最大の関心事が「アイデンティティ」であるため、夫婦愛だけでなく、人類愛にも置き換えて使用したと考えられる。またこの羽根板と撚り糸は、アキラやバンクスのアイデンティティに対する自信のなさから、家族を結びつける力が弱くなっているという不安を暗に示しているとも思われる。バンクスは、この比喩をその後、二回にわたって使用することになる。

一回目は、フィリップおじに対してである。バンクスには、幼少のころからフィリップおじと呼ぶ人物がいる。フィリップおじと呼んではいるが、バンクスの本当のおじではない。フィリップおじは、かつて、バンクスの父と同じ、モーガン・アンド・バイアット社の社員であった。しかし、バンクスの母親が展開する反阿片運動の活動に賛同して退社している。バンクスは、フィリップおじに対し、「どうやったら、もっとイギリス人らしく

なれると思いますか？」(79)と訊ねる場面がある。フィリップおじは、バンクスにとって理想的なイギリス人なのである。フィリップおじは、そんなバンクスに対し、様々な人種が住む上海の租界に生活しているのだから「混血みたいになったらどうだい」(80)といい聞かせる。人間がみな混ざり合えば、戦争も少なくなるといい、その方が「健康的だ」(80)というのである。しかし、バンクスはそうは思っていない。ここでフィリップおじにブラインドの羽根板と撚り糸の比喻を用いて「でも、もしぼくがそうになってしまったら、いろんなことが……(中略)。そこのブラインドみたいに——わたしは指を指した——もし撚り糸が切れてしまったら、すべてばらばらに散らばってしまうかもしれない」(80)と述べる。バンクスがここでいう「もしそうになったら」というのは、「もしもわたしが混血みたいになったら」という意味だろう。そして、混血みたいになったら撚り糸が切れて全てが散り散りになるとバンクスはいうのである。それを受けてフィリップおじは、バンクスに次のように返答する。

すべてが散り散りになってしまうかもしれないな。君のいう通りかもしれない。 (中略) 人は何かに属していると感じる必要がある。国とか民族とかね。そうじゃないと、何が起こるかかわからないからね。我々のこの文明も、まさしく崩壊してしまうかもしれない。そして君のいう通り、すべてばらばらになってしまう (80)。

フィリップおじは、バンクスに首肯しながら、独自の見解として、人間は、国や人種といったものに所属していると感じる必要があり、それがないと文明崩壊をもたらす可能性があるという認識を説明する。つまり、国や人種といった、〈同種〉であるという認識(撚り糸)が人間同士(ブラインドの羽根板)をつなげる役割を果たすことになるという説明しているのである。アキラが聞かされた「子は鏝」は、ここでは夫婦が国家に、子どもが民族に置き換えられて語られている。バンクスがよりイギリス人らしくなりたいと考える理由は、バンクス自身がイギリスに所属しているという認識に自信が持てないからなのである。そこでバンクスは、よりイギリス人らしくなるためにフィリップおじの真似をしたいと考えたのだ。バンクスは、フィリップおじに対して父親に勝る憧れと尊敬のまなざしをむけていることが示される。

バンクスの父親は、「立ち居振る舞いがいつも控えめで、他の人が自慢するのを恥ずかしいこと」(86) だと思ふような人物であった。また、フィリップおじに対してある種の劣等感を抱いているのが、母親と口論になった際の次の言葉にあらわれている。「悪かったな！ わたしがフィリップじゃなくて。わたしはそういうふうにはできてないんだ。悪かったね。ほんとうにお生憎さま！」(73)。そしてバンクスの母親は、みかけは、「伝統的なヴィクトリア朝」(“Victorian tradition”) (58) 風の美しさを有しているのだが、「あなたは裏切り者であり、悪魔の手先ですわ。(中略) もし、またこの家に姿を現したら、汚らわしい動物にするみたいにあなたにつばを吐きかけてやる」(123) と中国人マフィアのワン・クー (Wang Ku) に対して臆することなく怒号をあげせる強さも兼ね備えている。母親のダイアナ (Diana) は圧倒的な存在感があり、父親はそれに従順な姿で描かれている。そのような父親は、バンクスにとっては頼りない存在であり、男として手本にならないと考えているのである。実際、バンクスは、父親が失踪してから幾日も経たないときに次のように思っている。

フィリップおじは、ここ何年かのあいだにわたしが崇拜する人物になっていた。わたしの父が失踪した後の何日間か、フィリップおじがいつでも父のかわりになってくれるから、父の失踪のことはそれほど気にする必要はないと考えていた (126)。

バンクスは、フィリップおじがいつでも父親にとって代わることができると考えているのが分かる。数年という時間をかけて信頼を得たフィリップおじは、バンクスの気持ちを勝ち取ることに成功しているのである。しかし、実は、親切に一家に近づき、バンクスの支えとなっていたフィリップおじの正体は、「共産主義情報提供者」(“the communist informer”) (179) であり、ワン・クーの仲介人でイエロー・スネーク (Yellow Snake) と呼ばれる悪人であった。その後の母親の失踪にもフィリップおじが一枚かんでいるなどこのときのバンクスは、露にも思っていないのである。

その次にブラインドの羽根板と撚り糸の比喩が用いられるのは、バンクスが探偵となって、サマセット州 (Somerset) のコーニング (Corning) という村で子どもが複数人殺されるという事件が起きたときである。そこで

捜査にあっていた警部とバンクスが交わす会話の中で用いられる。警部はバンクスに対し、事件のおぞましさを口にする。何が起きたかは、詳細には語られない。ただ、二人の会話から、無差別殺人ではなく、子どもたちは、闇の組織によって殺されたことが暗に示されている。そしてバンクスは、警部に現実を受け入れるよう、次のように述べるのである。

警部、あなたほどの力量がある方は稀なんです。我々のような、悪と戦う義務を課せられている人間は、その……なんといったらいいですかね？ ブラインドの羽根板を束ねている撚り糸のようなものなんですよ。わたしたちがしっかりと束ねるのに失敗したら、すべてがばらになってしまう。だから任務を続けることがとても大事なんですよ、警部 (144)。

ここでバンクスは、探偵 [という職業] も警部 [という職業] も悪と戦う義務があり、そういった職業に就くものが「束ねるのに失敗したら」世界が崩壊するといっている。しかし、警部は、「わたしはただの小物」(144)で、悪と戦うことなどできないと返答をする。警部は、現実を直視しているのである。ブラインドの羽根板と撚り糸の比喩を、バンクスはここでは悪と戦う〈正義〉が〈世界〉を束ねることに用いている。バンクスの関心事が子どものころは、〈アイデンティティ〉だったのに対し、孤児となり、探偵となってからは、〈正義〉に移行していることが示されている。これは、バンクスがいかに夢想家、あるいは、理想主義的な人物であるかということを示すものである。イシグロは、バンクスが大人になって探偵となってからもこのことわざを使用させていることから、小説の中で重要な意味を持っていることが分かる。

バンクスは、フィリップおじの画策にはまり、街中に置き去りにされる形で、孤児になってしまう。家まで走って帰ると、バンクスを教育したメイ・リーが一人泣いているだけで、母親の姿はなかった。バンクスはメイ・リーをみて、「もう何年もわたしの恐怖と尊敬をほしいままにしてくせに。メイ・リーは、いんちきだったと今わかった」(131) と思っている。子どもながらにバンクスが築いてきた、アキラ、両親、メイ・リー、フィリップおじなどといった人間関係は、孤児になったことを境にすべて断ち切ら

れてしまう。つまり、バンクスの中で撚り糸が切れ、羽根板が床に散り散りに崩れ落ちた瞬間と捉えることができる。バンクスは口にこそしていないが、バンクスが使用するブラインドの羽根板と撚り糸の喩えはいい換えれば、家族や国家、そして世界をつないでいるのは、夫婦や民族そして人間同士の〈愛〉であることが分かる。バンクスは、人格形成に重要な十歳という幼少のころに、自らを取り巻くこの〈愛〉を一気に失ってしまったことになる。そして、このことが原因で、バンクスは、現実とは異なる空想世界を自らの内に構築していくようになるのである。

3. みじめな孤独野郎 (Miserable Loner)

孤児となったバンクスは、チェンバレン大佐 (Colonel Chamberlain) につき添われて乗船し、イギリスに住む伯母のもとへ引きとられることになる。バンクスは、後に探偵となり、大佐と再会する。そのときに大佐から、「おやまあ、あのおちびちゃんと同一人物とは思えない。船ではわたしのそばで泣きべそをかいていたのに」(24)といわれる。しかし、それをバンクスは真っ向から否定し、乗船したときの様子を次のように回想する。

わたしは船に乗り込んだときの自分の状況にも、将来の展望についても、ワクワクしていたことをはっきりと覚えている。もちろん両親がいなくなったことをときどきは寂しく思ったけれど。でも、そんなときは、自分が愛するようになり、信頼できる大人はいつでも他にいるんだと自分にいい聞かせていた (28-29)。

バンクスは、イギリスに渡ってからのことを楽しみにしていたように語っている。しかし、チェンバレン大佐は、バンクスは心ここにあらずの状態、些細なことで泣いたと述べている。チェンバレン大佐とバンクスのあいだには、明らかな記憶違いが生じているのが分かる。また、チェンバレン大佐は、船上でバンクスに次のようなことをいつている。「気の毒だね、坊ちゃん。まずは、お父さん。それから今度はお母さんまでが。全世界が自分の目の前で壊れていくような気持ちでしょうね。(中略)だから、強くなるんですよ。またすぐに生活を立て直すことができますよ (強調は論

者による)」(26)、あるいは、「あなたがどんな気持ちでいるかよくわかりますよ。全世界が目の前で壊れてしまったんだ。でも、強くならねばなりません(強調は論者による)」(27)。この二つの下線部の原文は、それぞれ、“the whole world’s collapsed around your ears.” (26) と、“Entire world’s collapsed about your ears.” (27) である。「世界が完全に崩れ落ちる」という言葉を大佐が二回繰り返したのか、それともバンクスが記憶の中で執拗に似たような言葉を二度繰り返したのかは定かではない。しかし、この言葉の繰り返しにはバンクスの真意が隠されている。上海からイギリスへ向かうバンクスにとって、それまでバンクスを取り巻いていた世界が崩壊したのは先述のとおり事実であり、そのときのバンクスは自らの状況をそう捉えていたのが示されているのである。つまり、バンクスが「ワクワクしていた」と語るのは、自己欺瞞なのだ。バンクスのこうした自己欺瞞は、バンクスの学校時代の旧友であるジェームス・オズボーン (James Osbourne) から「君は、ほんとうに学校で変わり者だったからな」(5) といわれたときにもあらわれる。バンクスは、「わたしの記憶では、イギリスの学校生活には、完璧に溶け込んでいたはずだ」(7) といい、なぜ自分が〈変わり者〉といわれていたのか見当もつかない。また、別の場面で、上海時代の古い友人である、アンソニー・モーガン (Anthony Morgan) と再会したときにも、バンクスはモーガンから、「あのさ、俺ら、チームを組むべきだったよな。一人ぼちなもの同士の二人組に」(195) といわれる。やはりここでも、バンクスはいつも〈一人ぼっち〉だったことが級友によって示されるのである。しかしバンクスは再び、真逆の記憶を語り始める。

しかし、わたしも彼みたいに“みじめな孤独野郎”だったという彼の主張にはさすがにびっくりした。彼と組めば、一人ぼっちのもの同士、ぴったりの二人組になったかもしれないというのである。これはモーガンの勝手な自己欺瞞であることに気づくのにしばらく時間がかかったが、何年も前に、不幸せな少年時代を、もっと味のあるものしたいと、彼が話をつくり上げたのは、明らかだった (196)。

バンクスの記憶の中においては、あくまでも自分は、〈一人ぼっち〉ではなく、「わたしはいつもみんなと仲よくやっていた」(196) というのである。

しかし、バンクスのこの主張は、モーガンによってきっぱりと否定される。なぜこのように、繰り返しバンクスと第三者のあいだに記憶違いが生じるのかを考えてみたい。先のチェンバレン大佐との記憶違いが生じたときと同様、当時のバンクスの精神状態は不安定であった。そして、バンクスの心の逃げ場は、上海にいたころにアキラと遊んでいた空想の〈探偵ごっこ〉だったと思われる。バンクスは一人で〈探偵ごっこ〉を頭の中で展開しており、ぶつぶつと独り言をつぶやく姿は、級友たちからみると〈変わり者〉に映ったのである。バンクスの〈空想世界〉には、アキラが存在しており、バンクスが「一人ではなかった」と感じているのはこのためである。〈空想世界〉は、悪から守られた想像上の上海租界だったのだ。そこには、恐らく、幸せだったころのバンクスがアキラとともに楽しく遊んでいるのである。しかし、次第にこの空想世界は、精神的に不安定となったバンクスの現実世界をも支配するようになったと考えられる。それを証明するかのよう、伯母の家の屋根裏に引っ越してからも度々一人で探偵ごっこをして遊んでいるバンクスを伯母やその友人たちが心配する様子が語られる。

「もう何時間もあんな風よ」伯母の声が聞こえた。「あのくらいの年齢の子が自分だけの世界にあんな風に浸りきっているなんて。不健康としかいいようがないわ。将来のことをそろそろみすえるべきだわ」「でも、仕方がないわよ」と、誰かがいった。「だってそうでしょう。あんなことがあった後なんですもの」(11)。

偶然にバンクスは、伯母たちのこの会話を耳にして“自分だけの世界にばかり浸りきっている”姿をこれ以上みせないように努めようと決心する。しかし、それ以降も伯母の足音などに耳をすませながら、空想の〈探偵ごっこ〉は継続していくのである。その結果、バンクスの中には現実世界とは違う、もう一つの空想世界が存在するようになったのだろう。肉体的に大人になっても、バンクスの精神状態は子どものまま留まり、〈空想世界〉がバンクスの心のよりどころとなったのである。これは、一種の自己防衛本能である。バンクスが記憶している過去と第三者が記憶している過去に食い違いが生じるのは、〈空想世界〉が原因だと考えられるのである。

4. サラ・ヘミングス (Sarah Hemmings)

バンクスはがはじめてサラと出会うのは、チャリングワース・クラブ (the Charingworth Club) である。彼女の容姿についてバンクスは、「肩までの長さの黒い髪で、小柄な、どこか妖精を思わせるような若い女性だった」(21) と述べている。サラは、以前、上流階級の中で彼女の地位を上げてくれる人物に近づき、婚約をしたことがあった。しかし、その相手が自分の基準にみあっていないと分かるや否や、容赦なく切り捨てるような冷酷さも備えている。また、社交界でサラのことを知らないものはいないほど、有名な人物であり、彼女の動く様をバンクスは、次のように描写する。「彼女は人込みの中を傲慢とも思えるほど優雅に移動していた。彼女の視線は何かを探しているかのように右から左へと動き、自分がそばに行くに値する人物を探しているのかとわたしには思えた」(17)。このサラの描写は、「母は確かに優雅で、背筋をしゃんとのばし、高慢とさえみえるほどだったが、彼女の目のあたりにはわたしがよく覚えている優しさを湛えていた」(58) というバンクスの母の描写と重なる。バンクスは、サラの中に母親のダイアナの姿をみていたのである。

サラの評判は、「“賢い”、“魅力的”、“複雑”」(19) というものが多い一方で、「ひどく横柄な新人類」(“terrible snob of a new sort”) (19) ともいわれていた。なぜ、サラが「複雑」と一般的に思われていたかといえば、それは彼女が孤児として、複雑な境遇で育ったからであろう。サラは、両親を事故で亡くした、孤児である。また、なぜ「ひどく横柄な新人類」と呼ばれているかといえば、サラは、接する相手が「有名でなければ、尊敬する価値がない」(19) と思っている、と世間から思われているからである。実際にバンクスもサラを観察していて、「著名人に囲まれていないとまともに息ができないのではという印象を持ったことが何度かあった」(19-20) と述べている。あるときサラは、バンク스에結婚相手を見つけるために社交場へ足を運んでいると告白している。その結婚相手は、単なる「有名」ではなく「世界のためになる人」(49) でなくてはならないというのである。それが人類のため、延いては、よりよい世界に貢献することになるからだ、とサラは信じているのである。サラのこの理想主義的な考え方は、バンクスの探偵になる夢の話に共通している。つまり、二人とも子どものころか

ら持ち続けていた「よりよい世界にたどり着きたい」という夢の域から離れられない大人なのである。サラにとっては結婚が、バンクスにとっては両親を探すという使命が、「よりよい世界」に連れて行ってくれると信じているのである。サラがバンクスに惹かれているにもかかわらず、サー・セシル・メドハースト（Sir Cecil Medhurst）という著名な老人と結婚したのは、彼女の夢を実現させるためだったのである。

その後、サラとバンクスが再会するのは、ある知人の結婚式に来賓者として参加したときである。サラは花嫁に将来花婿とどのような暮らしがしたいかと訊ねたときのことをバンクスに語っている。花嫁は、「小さな家に住みたい」と答えたときバンクスに話す。「小さな家」に愛する人と住むというのは、サラの現実的な夢でもあった。それさえ、叶えることができていることが示される。サラは、結婚が彼女の人生を、延いては、世界を平和にすると頑なに信じていたのだが、早くもその夢に敗れていたのである。そしてサラは、夫のサー・セシルと共に上海に行くことをバンクスに打ち明ける。「年ばかり取っていくし、もう機会は二度とないと思ったこともあったわ。でも、あたしたち、上海に行くのよ」(153)。これを聞いてバンクスは、なぜか安堵する。そして、バンクスは「わたしはどこかでこの瞬間を待っていたような気がした。わたしとサラとの友情は、ずっとこの一点をめがけて進んできたような、そんな感覚がした」(153)と思うのである。なぜ、バンクスはそのように思ったのだろうか。バンクスは以前、「どうもロンドンのバスは怖くてね。もし、バスに乗ったら、どこか自分が行きたくないところに連れて行かれるような気がしてね」(69)といい、一人でロンドン・バスに乗るのを恐がる一面をみせていた。つまりバンクスは、いつかは上海へ行きたいと思っていたが、一人で旅立つことを思い切れずにいたのである。そこへサラが上海へ行くことを知り、バスに乗るときと同様に、背中を押された（「この瞬間を待っていた」）ような気分になったのではないだろうか。バンクスがロンドン・バスに乗車する前にサラにいった次の言葉にその気持があらわされている。「喜んでご一緒しますよ。前もいったように、一人でバスに乗るのは怖くてね。あなたはベテランのようだし、これはわたしにとってはまたとない機会ですよ」(69)。

上海でサラと再会したバンクスは、サラの印象を「軽快な心持で自信に満ちて」(“light-hearted and assured”) (173) いるようにみえたと言語。しか

し、これは表向きに過ぎず、実際のサラは疲弊しきっていた。バンクスが上海を発つ予定はないのかとサラに訊ねると、サラは、「急いでどこかに行くということはないわ。だれかが救出にでも来てくれるようなことがない限りはね」(174)と返答する。バンクスは、サラが使用した、〈救出〉という言葉がその後もずっと思い返すようになる。バンクスは、サラがほんとうに幸せならば、「だれかが救出にでも来てくれない限りは」などと口にするはずがないと思ったのである。その真相がはっきりするのは、その次にサラとサー・セシルに会ったときである。サー・セシルは、サラのことを「浮浪者」(“vagabond”) (181)、「娼婦」(“wench”) (183)、「遊女」(“harlot”) (183)、「あばずれ」(“trollops”) (183)と罵り、ときには手をあげることもあった。同時に、サラが口にした〈救出〉という言葉の真意も明らかとなる。しかし、サラは、バンクスへの気遣いからなのか、なかなか本音を口にしない。また、バンクスもサラから無理やり真相を聞き出そうとはしていない。幼いころから周りを気にして育ってきた二人の人づきあい下手と容易に人に心が開けない警戒心が干渉しているのである。そのような二人に重要な転機が訪れる。それは、サラが〈救出〉という言葉が発したときから三度目に会ったときであった。サラは、公の場においても、もう涙を隠すことはしなくなっていた。サラは、上海を去る書類も船も用意したことをバンクスに告げ、「クリストファー、告白するわ。あたし、怖い。一人であそこに行きたくないのよ。あなたも一緒に行ってくれないかしらと思って」(226)と、バンクスと一緒にマカオへ行こうと誘う。今まではバンクスの背中を押してくれていたサラが、今度はバンクスと一緒に行って欲しいと懇願するのである。サラは、「明日行きましょうよ。もう一日たりとも無駄にするのは止めましょう。二人にとって手遅れにならないうちに行きましょう」(227)と説得する。ここで何が「手遅れ」になるのかについては、はっきりとは語られない。しかし、サラが、それまで彼女が正しいと信じていたものが実は、間違っていたということに気づかされ、真に欲しいものが分かったと次のように語ることでそれは明らかとなる。

あたしは、トロフィーのようなものを探しているうちに何年も無駄にしてしまったわ。ほんとうに、ほんとうにそれを手にするに値するだけのことをやった場合にだけもらえる、トロフィーのようなものを探

しているうちにね。でも、もういないの。今は他に欲しいものがあるから。温かくてあたしを守ってくれるもの。あたしが何をやっても、どんな人間になるとかに関係なく、戻っていけるものが。ただそこにあるもの、いつでもあるもの。ちょうど明日の空みたいに。そういうものが今は欲しいの。あなたもそういうものを欲しがっているはずだと思うのよ (227)。

サラは、いつでも戻っていける、明日の空のような、常にそこにある場所、つまり、〈家族〉が欲しいと思っていることが示される。サラは、バンク스와マカオへ渡り、バンクスの養女であるジェニファーとともに三人で暮らしていこう、その契機を逃したくないといっているのである。バンクスは、この話を聞いて、「わたしは長いこと暗く、狭い部屋に閉じ込められていて、いきなり戸外に出され、光と空気にさらされたようなめまいに襲われた」(227)と、まるで、出産のときの赤ん坊のような、あるいは、長いこと光のない独房に入れられていた囚人が外に出てきたような安堵感からくるめまいを感じていることが呈示される。これは、両親の捜索という十歳のころからの〈使命感〉とともに閉じ込められてきた自我がようやく解放された瞬間とも解釈できるだろう。サラは、まるでバンクスを生まれ変わらせる運命の女神のようにここでは描かれているのである。両親を捜索し、悪の手から二人を解放するというバンクスの長年の夢を放棄してマカオへ行くというサラの誘いは、バンクスにとって生まれ変わる機会となるはずであった。しかし、バンクスは両親を探すという慢性的な〈使命感〉を捨てることができず、運命の女神の差し出す手を取ることができなかったのである。サラとの待ち合わせに向かう途中で、両親の手掛かりを求めてイエ・チェン (Yeh Chen) の家へ向かい、事実上、サラと別れてしまう。サラが「手遅れになる前に、明日出発しましょう」とバンクスに迫った理由はここにもあったのだ。シンシア・F・ウォン (Cynthia F. Wong) が、「バンクスの頭には、幼少期に固定化された一つの〔両親と再会するという〕幻影と希望以外、何も入り込む余地はなかった (訳は論者による)」(93)と指摘するように、バンクスに考える時間を与えると、「バンクスは、両親を探しに出かけてしまう」とサラは気づいていたのである。

5. ノスタルジア

両親の捜索をするため、バンクスはチャペイの租界から出て、戦闘地域となっている密集地域に一人で捜索に出かける。そこで縄に縛られ、負傷した日本人兵士と遭遇する。バンクスは、その人物を瞬時にアキラだと思い込む。しかし、それはある日本人兵士が、緊迫した状況の中で自らの命を守るために、バンクスの話につじつまを合わせ、アキラになりきっていただけであった。バンクスは、周りにいる中国人が、「その日本人は、ユン伯母さんを殺した」(269)という主張を聞き入れず、他の誰かと勘違いしているのだと自分を正当化し、その日本人兵士を擁護する。バンクスは、アキラと思われるその人物に、子どものころの家を訪ねた話や租界の話をして聞かせる。

君にいえるのは、この何年もイギリスで暮らしてきたけど、[イギリスが]わたしの故郷だと感じたことは一度もなかったんだ。租界。あそこがいつもわたしの故郷だった。(中略)わたしたちが子どもだったころ、あそこはとても強固なものに思えた。君がたった今いったように、あそこはわたしたちの故郷なんだ。ただ一つの故郷だ(274)。

ここで再び、幼児性を保有したまま大人になったバンクスの姿が浮かび上がる。バンクスは、両親が失踪して以来、子どものころからずっと続けてきたアキラと両親捜索をする〈探偵ごっこ〉を現実世界で演出する必要がある。バンクスは、自らの空想世界と現実界のつじつまを合わせ、自らの〈空想世界〉を正当化させるためには、日本人の演出が必要だったのである。つまり、日本人であれば誰でもよかったのだ。その日本人をアキラと設定し、子どものころから繰り返してきた筋書きに沿って物語を進行させ、バンクスは、なかば強引にアキラと思われる日本人兵士とともに両親を捜索しようとするのである。そして、その日本人兵士に五歳になる息子がいることを知ると、バンクスは次のように述べる。

わたしたちが子どものころは (中略) いい世界に住んでいた。ここに
いる子どもたち、ここにくるまでにわたしたちが出会った子どもたち

のことだけど、世の中のものは、ほんとうはどんなにおぞましいものを、あんなに早い時期から知らなきゃいけないなんて、気の毒だ(281)。

バンクスは、子ども時代はとてもいい世界だったことを回想する。そして、大人になった今だからこそ、世の中を正すことができるのだとその日本人兵士に語りかけるのである。

結局、わたしたちが子どもだったころは、よくないことが起こっても、それを正そうにも力がなくてどうすることもできなかっただろう？ でも、今、大人になった今は、できるんだよ。そこなんだよ、分かるかい、アキラ？ 長い年月が経ったけど、ようやく正すことができるんだ。覚えているかい、わたしたちがよくやった遊びのことを？ 何度も何度も？ 探偵になってわたしの父を探し出すふりをしたことを？ 大人になった今、わたしたちはついに正しい方へ立てなおすことができるんだよ (281)。

しかし、そう語る一方で、バンクスはアキラに、「わたしたちが子どもだったころ、世界がどれほどよくみえたかって話だけど。ある意味、まったくのナンセンスだな。大人たちがわたしたちにそう思わせたというだけのことなんだ。子ども時代のことにノスタルジックになりすぎてはいけないよ」(282)と、一見矛盾しているようなことをいいます。するとアキラは、「大切。とても大切。ノスタルジック。ノスタルジックになる、わたしたち思い出す。大人になって知る、この世界よりもっといい世界のこと」(282)とバンクスに言葉を返す。これまでのバンクスは、どちらかといえば、両親捜索が世界を救うことにつながると信じていたり、子どものころに住んでいた家を訪れて郷愁に耽ったり、上海に行けばアキラに容易に会えると思っていたり、「ノスタルジックになりすぎて」いる人物であった。しかし、アキラと思われる人物に意見を押しつけられると、バンクスは、「この話が長くなればなるほど、ある種の危険が——それがどういう危険かははっきり知りたくはなかったが——どんどんと大きくなっていくのを感じ」(282)てくる。これはバンクスが、精神的な混乱をきたしている前兆だと

思われる。バンクスは、子どものころから頭の中で繰り返し展開してきた〈探偵ごっこ〉の筋書きをアキラと思われる日本人兵士によって否定されてしまったのである。それまで、一度も物語の筋書きは、訂正されたことはなかったはずである。しかし、現実には、この兵士のようにバンクスの意見に否定的な見解を示すのは自然なことである。バンクスは、このとき、空想と現実の区別がつかずに混乱したと考えられる。このまま話を続けると、自分の築いた空想世界が崩壊しそうな〈危険〉を察知して、話を中断したのではないだろうか。しかし、子どものころからバンクスの中に存在した空想世界が崩壊するという事は、単純にバンクスが現実世界に戻るということを意味するものではない。バンクス自身が真の狂人と化す恐れもあるのである。

イエ・チェンの家を探しあてたバンクスは、その家を前にして「突然、感きわまって圧倒される気持ち」(286)になる。いよいよ迎えようとしている〈探偵ごっこ〉のクライマックスを前にバンクスは、圧倒されたのだろう。アキラとおぼしき日本兵士は、そんなバンクスに対し、何度も現実的になるように諭す。しかし、バンクスの耳にその言葉はまったく届かない。それどころか、その日本兵士に、「よし、アキラ。中に入らなければ。一緒に行こう。腕を組んで。前にリン・チェンの部屋に入っていったときのように。覚えているかい、アキラ？」(286)と、まるで子ども時代へと退行し〈探偵ごっこ〉を再現しているかのような素振りをみせる。

家の中に入ると、爆撃を受けた後と思われる瓦礫の中に、六歳くらいの少女が立っていた。その少女は、犬が負傷しているので助けてほしいとバンクスらに懇願する。しかし、バンクスは、女の子のことよりも、まずは、死体の山をみて、その中に両親がいなかを確認してまわる。背後には、女の子の両親と思われる、腕が切断された女性や足が吹き飛ばされた男性の死体などが転がっている。バンクスは、死体が全員中国人であることを確認すると、両親ではなかったことに安堵する。すると突然、その日本人兵士が笑いだす。バンクスは「狂人」(“a lunatic”) (290) になってしまったのかと考えるのだが、ここに対峙している三人のうち、実は、その兵士だけがまともなのである。子どものころに離れ離れになった両親が今もそこに生きていると信じ、死体を確認してまわるバンクスや両親が目の前で死んだにもかかわらず、犬を助けてほしいと哀願する少女の方が余程まとも

ではないのだ。バンクスと少女に共通する点は、両親の死については一切考えず、あるいは、受け入れず、現実から目をそむけることに懸命になっていることである。

結局、三人とも日本軍に捕まってしまう。捕まったときにバンクスは、まるで子どものように「めそめそと泣いている」(294)ことに気がつく。そして、「わたしはここに両親を探しに来ました。でも、ここにはもういませんでした。遅すぎたようです」(294)と説明をする。責任者らしき長谷川大佐は、バンクスの話を聞いて、次のようなことを述べる。

子ども時代なんて、今となっては遠い過去のようなですな。(中略) むかし、日本の宮廷にこれがいかに悲しいことかと詠んだ女性歌人がいました。大人になってしまうと子ども時代のことが異国の地のように思えるとうたったんですよ (297)。

するとバンクスは、長谷川大佐に対して、次のように反論する。「お言葉ですが大佐、わたしにとって、子ども時代は、とても異国の地のようには思えないのです。色んな意味で、わたしはずっとそこで生きてきたのですから。でも、ようやく今、わたしはそこから旅立とうとしています」(297)。つまり、バンクスには、空想世界に自我を閉じ込めて、ずっと子ども時代の中で生きてきたようなものだから、子ども時代は異国の地とは思えないといっているのである。注目したいのは、その後にバンクスがつけ加えた、「そこからようやく今、旅立とうとしている」という言葉である。バンクスは自分自身に、アキラとおぼしき日本人と再会させ、二人で両親の搜索をし、両親を救出するには遅すぎたことを疑似体験させることができた。ようやく幼少期のまま捕らわれていた〈空想世界〉から「旅立つ」準備ができたことがこの言葉の中にあらわされている。

6. 結論

香港にあるローズデイル屋敷 (Rosedale Manor) に母親がいることを突きとめたバンクスは、母親に会いに行くことを決意する。心身疲弊、および、精神衰弱の末、記憶を喪失してしまった母は、バンクスをみても息子

と認識することはできなかった。しかし、バンクスが、「お母さん（中略）パフィンですよ。パフィンが来ましたよ」（327）と、むかし母親から呼ばれていた愛称で呼びかけると、母親は「パフィン」という言葉に反応を示す。それでバンクスは、母親はいつも変わらぬ愛情を持ち続けていたことを確認するのである。しかし、母親をそこから引き取ることはなく、一人でイギリスへと戻る。

養女のジェニファーになぜ修道女に息子であることを告げなかったのかと訊ねられるとバンクスは、「わたしにも分からないよ。おかしい話だと思うだろうが、でも、結局はいわないことにしたんだ」（328）とこたえている。両親が失踪して以来、ずっと二人の影を追い求めてきたバンクスがなぜ名乗らずに母親のもとを去ったのか。それは、この小説の題目にも登場する〈孤児〉についてバンクスが語る次の台詞に鍵が隠されているように思われる。

わたしたちのようなものは、消えてしまった両親の影を何年も追いかけている孤児のように世界と向き合うことを運命づけられている。最後までその使命を全うしようと、最善をつくすより他ないのだ。そうするまで、わたしたちには心の平穏は約束されないのだから（335-336）。

「わたしたちのようなもの」という「わたしたち」は、親の愛情を探し求める〈孤児〉ということだろう。その「わたしたち」は、消えた両親の影を長年追いかける孤児として世界と向き合うことを運命づけられていると述べる。その〈使命〉が全うされるまで心の平穏は約束されないと。見方を変えれば、バンクスは、母親を探した出した時点で〈使命〉は全うされ、〈孤児〉ではなくなったわけである。なぜ、〈使命〉を果たしたのに母親をロンドンに引き取らなかったのか。ここで再び、疑問が立ちあがってくるのである。バンクスは、一緒にマカオへ旅立たなかったことについてサラがバンクスに宛てた手紙の内容を思い出し、次のように語っている。

あなたはいつも、ご自分にはやらないといけない使命があると感じていらした。あなたはきっとそれを成し遂げるまでは、だれにも、そして何ごとにも心を開くことなどおできにならなかったでしょう。今は

すべてを終えられて、あたしが、当たり前のように幸せな生活やパートナーに恵まれたように、あなたも恵まれていらっしゃることを願うばかりです (335)。

サラがここでいうバンクスの〈使命〉とは、両親を捜索することである。バンクスがその〈使命〉を果たすまで誰にも、何にも心を許すことはない

とサラは分かっていたのだ。そして最後にサラは、彼女と同じように、バンクスにも人生の幸せと伴侶が見つかっていることを祈ると書いている。サラは、バンクスが〈使命〉を果たした後のことを心配しているのが分かる。つまり、ここで明らかになるのは、サラとバンクスの決定的な違いである。サラは、常にそこにある〈家族〉を求めているが、バンクスは、常に過去にあった〈家族〉の再構築を求めているということである。サラの最初の結婚は、上手くいかなかったが、サー・セシルと憎み合って別れたのではなく、サー・セシルが彼女を手放したのである。一方のバンクスは、〈家族〉になりたいと願ったサラの手を放してしまったのだ。また、もう一人の孤児であるジェニファーは、バンクスが両親を探しに上海へ戻ることを告げて、ジェニファーのもとを去ると、精神的に不安定になり自殺を図ったことがあった。ここで浮かび上がるのは、両親を亡くして孤児となったサラとジェニファー、両親が失踪して孤児となったバンクスの違いである。前者は、人との結びつきを強く求めるのに対し、後者は、人と関わることを極力避けている。最終的に母親と再会できたにもかかわらず、母親をロンドンへ連れて帰ることも、ましてや修道女たちに息子であることも告げずに、バンクスは帰路についている。つまり、バンクスは孤児となってしまったあの日、つまり、自分をとりまく世界が崩壊してしまった日以来、強固な人間関係を築けなくなってしまったのである。

ただ、バンクスは〈子ども時代〉に捕らわれたままだったときは、上海租界のことを唯一の故郷と呼んでいたが、母親と再会後は、ロンドンのことを、「この街 [ロンドン] がわたしの故郷になってきた」(336) と述べている。これはバンクスの大きな心境の変化を示している。ようやく精神的に固執していた過去 (上海) から離れ、現在 (イギリス) をホームと受け入れるに心境に至ったのである。真実を知り、バンクスの精神世界を支配していたもう一つの世界である〈子ども時代〉の要塞 [バンクスの空想

世界である上海租界] がバラバラと崩れ落ちたとき、そこには不変の愛情を持ちつづけた母親とルーツであるイギリスの二つがあったことにバンクスは気付かされたのだろう。

この小説の「孤児だったころ」が指すものは、「子どもだったころ」なのかもしれない。子どもたちは皆、ある意味小さな「探偵」であり、親の愛情を模索する生きものである。親と一緒に住んでいても、子どもは常に親の愛情の所在を確かめたくなるものである。それが〈子ども時代〉に、何の前触れもなく親と引き離されると、バンクスのように心に傷を負い、それがトラウマとなってしまう、いつまでも幼児性を保有し、〈子ども時代〉から抜け出せない〈変わり者〉になってしまう可能性は高い。主人公が用いる比喩や主人公が語らないものを総合して考えると、浮き彫りになってくるのが、両親が失踪して以来、両親を探し出すという空想や妄想で寂しさを紛らわせていた少年の「脆弱な人間関係」である。バンクスには、孤独から抜け出す機会は何度か訪れている。しかし、その機会をつかむことは一度もなかった。バンクスは、英国図書館で古い資料を閲覧しながら、むかし探偵だった頃、つまり両親を探し求める「孤児（子ども）だったころ」の世界から結局、抜け出すことはできなかったのである。物語の終盤、バンクスは一人、公園で散歩をしたり、画廊を訪れたり、大英博物館で自分が解決したむかしの記事を閲覧室で読んだりして、「愚かなプライド」(336) をくすぐりながら生活していることが語られる。そして、バンクスは「一人の時間が空しく感じられるようなこと」(336) があれば、そのときは、一緒に住もうというジェニファーの提案を真剣に考えてみようと思ったりしている。しかし、恐らく、バンクスは一人であることを選ぶだろう。〈子ども時代〉に捕らわれたままでいた自我を解放させ、母親と再会することに成功はしたものの、皮肉にも老人となった現在も、一人で空想にふけることでバンクスは〈安らぎ〉を得ているのである。

幼少期に孤児となり、自身を取り巻く世界が崩壊したバンクスにとって、ふたたび人間どうしの結びつきを得るのは困難だったのである。たとえそれが母親であっても、再構築するのは難しかったのだろう。バンクスが終始語らなかつたもの、および比喩であらわしていたものは〈愛〉にほかならない。しかし、どんなに強く欲していても、運命に翻弄され、選択をあやまってしまうと、一瞬にしてそれは手からすりぬけてしまう。そして、

その瞬間を一生思い返しながらか生きていくことになるのである。イシグロは、『わたしたちが孤児だったころ』という小説を通して、〈子ども時代〉の大切さと危うさを同時に我々に示したのである。

注

1. テキストは Kazuo Ishiguro, *When We Were Orphans* (New York: Vintage Books, 2001) を使用し、引用頁数は同書からのものである。また訳文は拙訳だが、カズオ・イシグロ『わたしたちが孤児だったころ』（入江真佐子訳、早川書房、2001年）を参考にした。
2. 例えば、平井法「カズオ・イシグロ『わたしたちが孤児だったころ』論」『学苑・文化創造学科紀要第805号』（昭和女子大学、2007年11月）28、あるいは莊中孝之「Kazuo Ishiguroの作品に見られる母性への憧憬：When We Were Orphansを中心に」『SELL: 京都外国語大学英米語学科研究会第24巻』（京都外国語大学、2007年）84、などを参照のこと。
3. イシグロはインタビューで、“Banks starts off relatively sane, then starts to go pretty insane.” (Mason 4) と語っている。

参考文献

- 阿川佐和子 (2001) 「阿川佐和子のこの人に会いたい——カズオ・イシグロ」『週刊文春』第43巻42号、144-148.
- 平井 法 (2007) 「カズオ・イシグロ『わたしたちが孤児だったころ』論」『学苑・文化創造学科紀要』第805号、21-31. 昭和女子大学.
- 廣田園子 (2010) “Consoled by Fantasy: Kazuo Ishiguro’s *When We Were Orphans*.” 『英文学論叢』第54号、14-32. 京都女子大学英文学会.
- 池澤夏樹 (2002) 「いま小説が目指すこと——カズオ・イシグロVS池澤夏樹」第14回ハヤカワ国際フォーラム、『ミステリマガジン』2月号、12-17.
- Mason, Gregory (2008) “An Interview with Kazuo Ishiguro.” In Brian W. Shaffer and Cynthia F. Wong (eds.) *Conversations with Kazuo Ishiguro*, 4-14. Mississippi: U of Mississippi.
- 松岡直美 (2004) “Kazuo Ishiguro and Shanghai.” 『国際関係研究』第25巻第3号、99-109. 日本大学国際関係学部国際関係研究所.
- Doring, Tobias (2006) “Sherlock Holmes – He Dead: Disenchanting the English Detective in Kazuo Ishiguro’s *When We Were Orphans*.” In Christine Matzke and Susanne Muheisen (eds.) *Postcolonial Postmortems: Crime Fiction from a Transcultural Perspectives*, 59-86. Amsterdam: Rodopi.
- 和田 俊 (1990) 「カズオ・イシグロを読む」『朝日ジャーナル』1月号、101-106.

カズオ・イシグロの『わたしたちが孤児だったころ』の意味するもの

Wong, Cynthia (2000) *Kazuo Ishiguro*. London: Northcote House Publishers Ltd.